

## もっと仕事は数字で考えなきゃ!

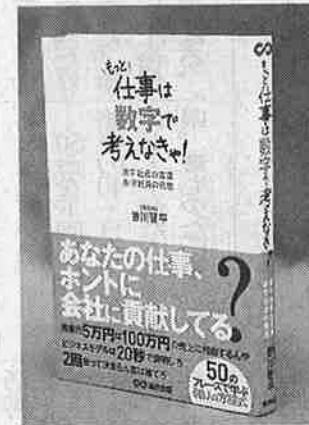
香川晋平著

「何気ない会話や仕事ぶりを見ただけで、『黒字社員』か『赤字社員』かがわかる」。冒頭の一文に、思わず居すまいを正してしまった。

黒字社員とは、会社の利益に貢献する人材。赤字社員は、会社に損失を与える人だ。営業成績や役職、過去の職歴を聞かなくても、会話やメールを少し交わせば、相手がどちらの人物なのか見分けられるという。最初の印象と、一緒に仕事をした後の実像は、ほぼ合致しているのだそうだ。

著者は、尼崎を拠点に活動する公認会計士。本書が3作目だ。赤字・黒字社員を見分ける眼力は、著者の豊富な実務経験に裏打ちされたものだ。

その分岐点は、売り上げ▽コスト▽生産性▽資金繰り▽隠れコストの五つの要素で、数字を意識しながら仕事に取り組むかどうかにある。本書もこれらに準じて5章で構成。各章に10項の文章が収められ、販売戦略、接待交際費、業務改善、在庫、会議などをテーマに、数字を自在に



あさ出版  
1470円

## 経験に基づく経営のヒント

使いこなしながら利益を上げる人の仕事ぶりや、赤字を生む社員の思考パターンが満載されている。

各項の扉には、もっけの本質を表した格言「黒字コトバ」も並ぶ。「ビジネスモデルを20秒で説明してみい。説明できな、ロコミにならんねん」「残業代5万円は100万円の売り上げに相当するんや」「在庫は罪庫」と分かりやすい。

人材に関する考え方も明快だ。会社の宝である「人材」▽役割をきちんとこなす「人材」▽いるだけの「人在」▽存在自体が罪で、会社にとって早く辞めてもらいたい「人罪」に分類する。

このうち人罪は、自分の非を棚に上げて、商談を断った顧客やミスを指摘した上司に矢を放ち、同僚の過失を見つけては周囲に言い触らして、職場の雰囲気や士気を乱す。「ワイルスマンはすぐに隔離しろ」。実務の向上だけでなく、組織運営のヒントにもなる1冊である。

(天久保 斉・東播支社)